愛知大学初代学長・林毅陸氏関連調査スタート

―2012 年 1 月、慶應義塾福澤研究センターを訪問―

佃 隆一郎

はじめに

現在の佐藤元彦学長で、延べ 16 代に及んでいる愛知大学長の初代は、1946（昭和 21）年 11 月の創立時から 1950 年６月まで務めた林毅陸（きろく）氏（1872 年生れ。以下本文では、歴史上の人物として、林氏をはじめとする愛大関係者の敬称は省略）であった。「明治時代後期から昭和時代にかけての外交史家、政治家」1）として近代日本史に名を刻んでいる林は、愛知大学の前身といえる東亜同文書院大学の経営母体であった東亜同文会の理事に就いていて、その前には慶應義塾（大学）の塾長（学長）を務めた人でもあった。

このように初代愛知大学長という面のみならず、外交史に政治史、そして慶應義塾の歴史にとって重要な位置を占めている林毅陸であるが、これまで愛知大学が編集・発行してきた「愛知大学史」関連の書では、同じく愛大創設期の主要人物であり、東亜同文書院大の元教員でもあった本間喜一（第２・４代学長）と小岩井淨（第３代学長）の“陰に隠れていた”感があった。しかし今回、愛知大学東京事務所での「語りべの会」活動に併せる形で、林の「初代学長」としての役割や意義を掘り起こす動きを大学レベルで立ち上げることになり、まずは林毅陸に関する資料の所在確認と情報収集のため、東亜同文書院大学記念センター長の馬場毅現代中国学部教授と同センター内大学史事務室の佃隆一郎が、“同じく学長（塾長）であった”慶應義塾の学園・大学史研究機関である福澤研究センター（以下原則「慶應福澤センター」と記）への訪問を、2012（平成 24）年１月 19 日に行なった次第となった。

初代愛知大学長・林毅陸
（愛大当局の通常使用写真）

以下本稿では“林初代学長関連研究スタートの報告”として、初めに林毅陸に関するこれまでの各書での言及を通じて、慶應福澤センター訪問前の段階で浮かび上がった林毅陸の経歴を概述し、続いて同センターへの訪問の報告と、今後の方向性についてお知らせしたいと思う。

（紹介する資料の表記は、一部旧字体を新字体に改めますが、その他引用の際は原文のままとします。引用文の中略や注記は〔 〕をつけて示します）

１. これまで把握してきた林毅陸の経歴と、林関連の記述

初代愛知大学長となった林毅陸は、就任時にはすでに 74 歳になっていた。その時までの林

愛知大学創設時に神野（かみの）太郎氏宅を訪問した、
林毅陸学長をはじめとする愛知大学スタッフ
（前列向かって左から三人目が林学長。その後ろの左が小岩井淨氏、右が本間喜一氏。
林学長右隣りの神野太郎氏については文末註12参照。神野信郎氏撮影、提供）

の重厚な経歴は、大学設立認可（1946年11月15日）の3か月前（8月1日）、林本人から田中耕太郎文部大臣に提出された文書、「財団法人愛知大学寄附行為許可申請」中の「履歴書」からうかがい知ることができる2)。

本文中の〈付表1〉は、それをまとめた「林毅陸履歴」であり、参照をお願いしたいが、これは林の慶應義塾大学部卒業から記されたものであり、また当然ながら、文書提出後の経歴はない。そこでまず前者、すなわち慶大卒業までの経歴を簡単に述べてみれば、1872（明治5）年に長崎県東松浦郡田野町（現在は佐賀県に編入）の中村家に生まれた毅陸は、9歳の時に東京でフランス学の塾を開いていた兄に連れられて上京し、やがてその塾の近くで漢学塾を開いていた林瀧三郎の目にとまって、出身地の香川県に帰ることになった瀧三郎に預けられることになり、89（明治22）年にはその養子となった。養子縁組は東京に戻っての進学に合わせたものであり、慶應入りは福澤諭吉の崇拝者であった義兄の勧めであった。

福澤の講話をじかに聴いた慶應義塾で頭角を現し、大学部を首席で卒業した林毅陸は、〈付表1〉の通りすぐに同義塾の教員となり、欧州留学や衆議院議員当選を経て、1923（大正12）年の塾長兼大学総長就任へと至るのであって、10年に及んだ塾長在任中の代表的功績には、神奈川県日吉キャンパスの開設計画がある（戦後の各大学の潮流となった“学園拡張のための郊外進出”の先駆けとして、画期的なものであったといえよう）。留学からの帰国後著した『欧州近世外交史』や、のちの愛知大学長就任直後に上梓された『欧州最近外交史』は、林毅陸の代表的著書となっている。林毅陸の東亜同文会理事就任は、慶應の塾長・総長を退任した3年後の1936（昭和11）年であったが、この時期には財団法人交詢（こうじゅん）社の理事長や、日本放送協会（NHK）の理事などにも当選・就任しているのは、これも〈付表1〉の通りであり、その最後にあるように、敗戦後それら理事職を退任・辞任してから愛大学長就任までの期間、（明治憲法下での天皇の最高諮問機関であった）枢密院の顧問官という、国家の要職を拝命したことも特筆すべきであろう。

そしてその「愛知大学長就任」であるが、新大学の初代学長に本間喜一は小岩井淨を推薦しようと、小岩井は本間にお願いしようと考えていたが、本間は東亜同文書院大学長時代に学生を戦地に送ることになった責任から、小岩井は学究に専念したい意向からそれぞれ固辞し、東亜同文会の理事であった林毅陸に白羽の矢が立ち、1946年6月に本間・小岩井と、（朝鮮半島にあった京城帝国大学の法文学部長だった）大内武次の3人が東京渋谷の林邸を訪ね、“枢密顧問官であられる先生にはご迷惑と存じておりますが、東亜同文書院など海外から引き揚げてきた学生らの将来に対する責任から、先生に学長をぜひお願いしたい”との旨の説得を本間が行ない、林がしばしの沈思黙考のあと引き受けたという一連の経緯は、愛知大学創立10年後に刊行された『愛知大学10年の歩み』および、その増補版にあたる『愛知大学―二十年の歩み

―』に、ドラマチックな筆調で描かれている3)。

こうして、まずは文部省への設立申請のための「愛知大学設立委員長」となった林毅陸であったが、新大学の場所が豊橋市南郊の旧陸軍第一予備士官学校の敷地・施設に決定したことをうけて、林が正式書類を持って豊橋を訪れることになっていた7月4日には、実際は体調を崩して来られなかったとのことであり4)、年齢上の健康不安は当初からあったようである。しかし本間喜一ら有志の尽力と、豊橋市当局の積極的な協力により、開校の準備は着々となされ、11月15日の設置認可、すなわち愛知大学の創立に至ったのである。

愛知大学の組織・経営は当初より学長が理事長を必然的に兼ねる形になっていて、林毅陸は愛大の初代理事長にも就任したことになるが、1947（昭和22）年5月の新憲法の施行により枢密院が廃止になってからも、前述した年齢・健康面や東京との行き来により、林は愛大での職務にはなかなか意のごとく専念できない“ハンディ”があったかもしれない（本間や小岩井らは大学近くの公館―元師団長官舎―に常時滞在）。しかし、息子の林喜八郎氏がのち出版した『生立の記』での本間喜一による回想文では、「学長名義だけを貸しておくというようなことは、先生の御性格上、潔よしとなさらなかった」5）との記述があり、林毅陸は愛大学長在任時も、変わらぬ情熱を傾注していたと言えよう。

いっぽう、理事に就いていた本間喜一は、同じ47年に最高裁判所初代事務総長に任命されたことにより、普段は愛知大学から離れざるを得なくなることになったが、創立1周年を迎えた47年11月15日、記念式典後公館に集まった愛大役員および来賓が揮毫した寄せ書きには、林の「自由在不自由中 福澤先生語」や、本間の「致中和」などが力強く記された6)。そして1950（昭和25）年6月23日、最高裁事務総長を辞任してすぐに第2代学長に就任した本間喜一の活躍を見届けてからのように、半年後の12月17日、林毅陸は「老齢のため病を得て療養中のところ」7）東京の自宅で79歳の生涯を閉じたのであった。

このように林毅陸初代学長は、愛知大学創立から4年で世を去ったが、その後愛知大は、学内で起こった「愛大事件」（1952年5月）のような試練に遭いながらも、本間喜一・小岩井淨両学長のもと、豊橋、さらには名古屋（車道）の地に根を着実に下ろしていくことになる。ただ「愛知大学史」というスパンでみれば、林毅陸が登場していたのはいわば「草創期」に限定

〈付表1〉「財団法人 愛知大学寄付行為許可申請（1946.8.1）」での林毅陸履歴

（〔 〕内は今回の注記および、その他文献・資料に記されている分）

年月日	西暦	記述内容（一部現代風の文体・表記に）
明28.12.	1895	慶應義塾大学文学科卒業
29.1.	1896	慶應義塾〔予科〕教員就任
31.2.	1898	〔慶應義塾普通科主任就任〕
34.2.	1901	同塾より欧州〔フランス〕留学拝命 （研究内容…専攻科目の欧州外交史のほか 比較憲法―特に英国憲法―）
38.2.	1905	帰国、慶應義塾大学政治学科教授就任 （担当…欧州外交史のほか英国憲法）
41.11.	1908	東京高等商業学校講師嘱託（担当…外交史〔大12.3まで〕）
43.4.	1910	慶應義塾大学政治学科主任（のちの学部長）

45.5.15	1912	衆議院議員当選(のち更に3回当選)
大 5.4.1	1916	「大正 3,4 年の功」〔軍部大臣現役武官制撤廃カ〕 により勲四等瑞宝章授受
8.4.12	1919	「ブルゼル」(ブリュッセル)万国商事会議参列のため 衆議院より派遣渡欧(一行の副団長に)
同.4.23		法学博士の学位授受〔博士会の推薦による〕
同.7.25		パリ平和会議において日本全権事務所より 「1839 年条約」 〔ベルギー,オランダに関するロンドン条約〕委員会委員嘱託
9.1.	1920	帰国
同.8.26		任外務省参事官、叙高等官二等
同.9.7		対独平和条約等締結の功により勲三等瑞宝章授受
同.9.10		叙正五位
10.8.	1921	〔高等試験臨時委員を仰せ付けられる〕
同.9.27		ワシントン会議参列の全権委員随員を仰せ付けられる
11.6.14	1922	依願免官
同.12.8		慶應義塾理事当選
12.5.15	1923	衆議院議員辞職
同.7.6		臨時法制審議会臨時委員を仰せ付けられる
同.7.16		教育評議会委員を仰せ付けられる
同.11.20		慶應義塾塾長当選、同塾大学総長兼任
13.4.15	1924	文政審議会委員を仰せ付けられる
同.5.31		ワシントン会議の功により金杯一組授受
昭 3.11.10	1928	私立大学長総代として即位大礼参列 旭日中綬章授受
4.10.5	1929	民間功労者として伊勢式年遷宮大典参列
8.11.28	1933	慶應義塾理事塾長兼同塾大学総長任期満了退任
同.12.1		慶應義塾大学法学部教授就任〔担当…外交史〕
9.3.1	1934	財団法人交詢社理事長当選
10.4.1	1935	日本放送協会理事就任
11.1.31	1936	帝国学士院会員に仰せ付けられる
同.12.1		東亜同文会理事就任
15.3.4	1940	〔財団法人標準ローマ字会理事長当選、 同時にローマ字ヒロメ会会頭就任〕
19.3.31	1944	慶應義塾大学法学部教授退任
同.4.1		慶應義塾大学名誉教授に〔講師兼任〕
同.11.29		交詢社理事任期満了退任
20.10.	1945	東亜同文会理事退任〔他の各記述では 21.2.28 とあるが、それを訂正〕
21.4.26	1946	日本放送協会理事辞任
同.6.10		枢密顧問官拝命〔22.5.2 まで〕

された形になるため、その後の試練克服と発展を成し遂げた本間や小岩井に重点が行くのは、致し方ないことではあろう。しかしそれでも、前述したように『愛知大学 10 年の歩み』と『愛知大学―二十年の歩み―』には、最初の学長としての林毅陸は確かに述べられているのであり、当時の大学資料としては、例えば『愛知大学新聞』第1号（1948 年9月 15 日）での学長「発刊の辞」に、林の矜持が如実に示されている8)。

そして、愛知大学創立 50 周年期に編纂された『愛知大学五十年史』では、1997 年にまず刊行された『…資料編』に、前述した林毅陸「履歴書」が掲載されたのに続き、2000 年刊行の『…通史編』には、先の両書での記述を圧縮しつつ、林についての新たな記載も設けられている。また、同時期に卒業生有志によって刊行された『愛知大学創設期からの 想い出写真文集』では、『生立の記』での本間喜一による回想文の引用のほか、本間の息女である殿岡晟子（あきこ）氏の寄稿「林毅陸先生の思い出」および、林の息女である和子氏よりの手紙「愛知大学への思い」が収録されている9)。

さらに、創立 60 周年に合わせて東亜同文書院大学記念センターが刊行したブックレット『愛知大学創成期の群像 写真集』では、林毅陸を本間喜一・小岩井淨とともに「三人の学長」として位置づけ、林について見開き2ページを用いて写真のほか略歴とエピソードを掲載している10)。やはりこの時期に武田信照第 14 代学長がライターの加藤勝美氏へ執筆を依頼し、この度（2011 年4月）上梓を果たした本格評伝『愛知大学を創った男たち―本間喜一、小岩井淨とその時代―』でも、「初代学長、林毅陸の生涯」として1章が設けられた11)。このように、林毅陸についてはまだ具体的とは言えないものの、本学刊行の各書からはある程度生涯をうかがえるようになったのが、現段階での全般的な到達度である。

2．慶應義塾福澤研究センターでの調査

こうして“解明”の第一段階が形作られてきた「林毅陸像」の、次なる調査ステップにおける方針の一つと今回位置づけられたことは、初代愛知大学長就任以前、すなわち（東亜同文会理事を含めた）慶應義塾時代の、林の塾長時代をはじめとする足跡を探究することであった。この方向づけは（慶應出身の）佐藤元彦現学長や、馬場毅現東亜同文書院大学記念センター長らの首脳会談レベルで決められたようであり、筆者としては全体をうかがう立場でない面もあるが、ここでは実際に行なった慶應義塾福澤研究センターへの訪問の報告と、今後の方向性についての私見を以下述べることにしたい。

2011 年暮れに馬場毅記念センター長より筆者へ、慶應福澤センターへ林毅陸について調査に赴く計画が伝えられ、ひとまず筆者が林毅陸に関する確認を、各文献やインターネットから行ない、その上で同センター宛ての「調査・確認を希望する項目を記した文書」を当年中に作成した。以下その「項目」の箇所を別掲する（〔 〕は今回の注記）。

（1）資料にある林毅陸先生の略歴の確認

愛知大学設立時の申請書類（1946 年）にある林毅陸先生の履歴書〔先の〈付表1〉に相当〕の記述に相違がないか、またほかに特記すべき事項があるかどうかの確認。

（2）林毅陸先生と東亜同文会との関係と、同会理事就任（1937 年）にいたる経緯

とりわけ、慶應義塾塾長兼大学総長時代（1923～33 年）に東亜同文会・同文書院の関係者と接触や交流があったかどうか。

（3）豊橋市での愛知大学設立に協力した地元実業家の神野太郎氏（豊橋三田会〔慶應義塾のＯＢ会〕役員）と、林毅陸先生との関係

神野太郎氏（『慶應義塾史事典』〔同事典編集委員会編、2008 年〕には記載なし）が

学生や役員として、塾長・教員の林毅陸先生とじかに接していたのかどうか12)。

（4）その他、林毅陸先生の慶應義塾時代

林毅陸先生の“塾長・教育者”としての素顔や人間味がうかがえるエピソードがあれば拝聴を希望（著書などの業績についてはある程度確認済み）13)。

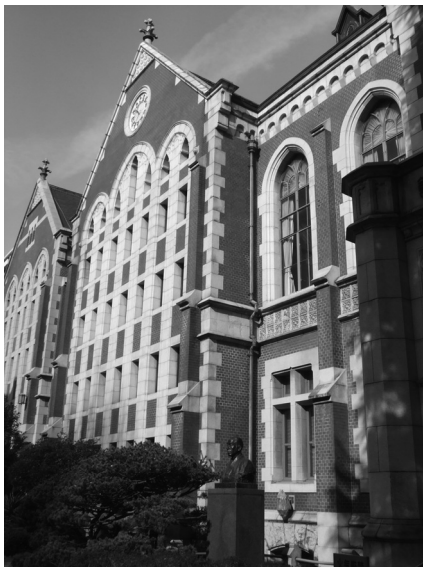
しかし、日程やメンバーについては年末年始が挟まったこともあり、馬場センター長と筆者との両名で１月 19 日（木曜日）に行くことが固まったのは、年が明けた「成人の日」連休明けとなった。訪問希望日の一週間前にあたる 12 日に、慶應福澤センター（代表メールアドレス）宛てへ、挨拶文に先の「…項目を記した文書」を馬場センター長が添削した改訂版および、前掲した〈付表１〉にあたる「林毅陸履歴」を添付して、筆者が電子メールで送信したが、発信の際の不具合（原因は後日判明）により、それら文書を慶應福澤センターが確認して下さったのは、（17 日の名古屋―三好―校舎での馬場センター長との打ち合わせに基づき）電話で状況をうかがった上でファックスで再送信した 18 日、すなわち前日となってしまった。

このため相手方を当惑させたであろう結果となったが、当日の午前 10 時 30 分に予定通り実施した訪問では、慶應福澤センターの専任教員であられる西澤直子教授が、文書に合わせた林毅陸関係の資料および目録を用意していて下さり、それらのコピーを拝受した。それらを一覧としてまとめたものが〈付表２〉であり 14)、林毅陸および養父の瀧三郎がうつっている写真をまとめたアルバムも拝見させていただいた。

〈付表2〉2012.1.19 授受 慶應義塾福澤研究センターよりの目録・複写資料

（順不同）

No.	表題	編著者・刊行元	刊行年	記事
1	（慶應福澤センター所蔵「林毅陸」関係資料目録）			エクセルデータを印刷（下共）
2	（慶應福澤センター所蔵「林毅陸」関係図書目録）			
3	『慶應義塾出身名流列傳』「（はノ部）林毅陸氏」	三田商業研究会（編）実業之世界社（発行）	1909	
4	枢密院文書「履歴書 林毅陸」		1947	国立公文書館所蔵。タイプ打ちに手書きを追加
5	『法學研究』第二十四巻第九・十合併号「林毅陸先生追悼号」内「林毅陸先生略歴」	慶應義塾大学法学研究会	1951	
6	『慶應義塾歴代役職者一覧（増補版）』「6. 林毅陸」	慶應義塾塾監局塾史資料室	1980	
7	（写真…林毅陸揮毫の書 2種3点）			号「弘堂」。「敬事即自尊」（2点）及び「一誠以貫百行」



慶應義塾福澤研究センターが置かれている同義塾旧図書館
（右端の出入口の前にあるのが福澤諭吉胸像。訪問日に撮影）

〈付表２〉での№.３～６で確認した“追加すべき事項”を、先に作成した「林毅陸履歴」に〔 〕囲みで加えたものが、前掲した〈付表１〉である。その他、別件で馬場センター長が、外部資金申請のための協力要請を西澤教授に行なったほか、同教授の案内で、福澤センター隣りの展示室および、慶應義塾内の重要文化財「三田演説館」を見学して、午後１時前に同義塾を後にした。

現在のところ慶應福澤センターでは、林毅陸に関する具体的・体系的な資料・情報は、充分な把握までには至っていなかった点があったようであり、（当初考えていた）「聞き取り調査」とまでには行かなかったが、西澤教授は今後の情報交換を約束して下さった次第であり15)、今後の林毅陸研究に道筋がつけられるよう努めたいところである。

おわりに

このように、今回の調査では先の「調査・確認を希望する項目」については、（1）以外では“前進のきっかけ”を得がたい結果となった。慶應義塾福澤研究センターの皆様には、お願いが急な形になってしまったことを改めてお詫び申し上げるが、今後林毅陸に関しての情報交換（共有）の機会をいただけるべく、変わらぬご愛顧のほどを重ねてお願いいたしたいところである。

そのためにはまず本愛知大学側から、“林毅陸関連情報”の発掘に努めなければならないことは言うまでもないが、慶應福澤センター訪問後に浮かび上がってきた注目点として、林と本間喜一との“真の接点”をお知らせすることで区切りとしたい。

それは、先ほど（2011年４月から９月まで）和木康光氏が『中部経済新聞』に連載した「知を愛し人を育み 愛知大学物語」の第47回（５月26日付）にある“神野太郎関連記述”での

> 神野太郎は財界を代表する存在だった。だが、神野は単に財界人というだけでなく、愛知大学をめぐる人物相関図にあって大学と近しい関係にあった。それには学閥的なつながりが見逃せない。キーポイントは“三田”―慶応義塾である。慶応義塾大学に学んだ神野にとって、愛知大学学長の林毅陸は大学時代の総長であり、その<u>林と本間が縁戚にもあること</u>、また、信託法の権威だった三渕忠彦のゼミナールに出ていて、〔…〕三渕に私淑した。その三渕は愛知大学の顧問をしている。〔／〕こうして“三田会”を通じてもろもろの深いかかわりがある愛知大学に、神野としても並々ならぬ協力をみせるのだった16)。
> （下線は今回付記）

という一節に見られる。この記述は慶應訪問前に確認していたものの、福澤センターでうかがうまでには至らなかった（この記事のコピーは

贈呈)。しかしその後、先に紹介した『愛知大学創設期からの 想い出写真文集』編集の代表世話人を務めた越知專（まこと）氏からの教示で、同書を見直してみたところ、殿岡晟子氏による「林毅陸先生の思い出」の末尾に、

〔林毅陸〕先生とのご縁は、慶応大学の総長もされた小泉信三先生と縁続きであり、小泉先生の奥様は、母（本間喜一氏夫人―原文―）の本家にご姉妹がお嫁にいらしていた関係で、小泉先生を通じて、林家とは旧知の間柄であった 17)。

と書かれていたのであり、興味深い。これらからうかがえる“愛知大学創立時の人脈”は、林毅陸のあとを受けて慶應義塾長になった小泉信三（在任 1933～47 年。現天皇の教育係を務めたことでも知られる）をも交えて、今後さらに追究していくべきテーマであろう。

註

1）『国史大辞典 11』（1990 年、吉川弘文館）678 頁での、見出し「林毅陸」での記述（鳥海靖執筆）。

2）「財団法人愛知大学設立申請人」としての林毅陸名義の「財団法人 愛知大学寄附行為許可申請」は、愛知大学に保管されていた「控」をもとに 1997 年、『愛知大学五十年史 資料編』（同史編纂委員会編）に収録された。文末付表は同書の 85～87 頁にある「十、設立者及理事履歴書附戸籍抄本並身分証明書」の「林毅陸」分による。（同日付で同書にやはり収録の「愛知大学設立認可申請」にも同様の記述があるが―52～53 頁―、それに加えて訂正がされている「…寄付行為…」のをここでは採用）

3）該当箇所は、『愛知大学 10 年の歩み』（愛知大学十年史編纂委員会編、1956 年。以下『10 年史』）17～20 頁及び、『愛知大学―二十年の歩み―』（愛知大学二十年史編集委員会編、1972 年。以下『20 年史』）26～29 頁。

4）『10 年史』17 頁及び、『20 年史』25 頁。本間喜一らが名古屋財務局に掛け合って第一予備士官学校借用の許可証を受け取ったのは 6 月 28 日であり、この前日の 7 月 3 日には「愛知大学設立事務所」が豊橋市街の旧陸軍第十八連隊（吉田城跡）建物に設営されていた。

5）林喜八郎『生立の記　林毅陸手記』（1954 年、私家出版）121 頁。同頁での本間喜一の回想には、ほかにも「林は毎月十日間は豊橋まで出向いて校務のほか外交史の講義もし」「暑い盛りのなか、闇屋で満員の名鉄に乗って名古屋、岡崎で寄附金集めに歩いた」（本文に後掲する加藤勝美『愛知大学を創った男たち―本間喜一、小岩井淨とその時代―』―2011 年、愛知大学―362 頁での要約）との旨のエピソードが述べられている

6）この色紙にはそのほか、中心に三淵忠彦最高裁長官の「任重而道遠」が記され、小岩井淨の「観取必然即自由」などといった、“現状打破”的な言葉が多く記された（掛軸にして愛知大学豊橋校舎内の大学史展示室で公開）。三淵と本間喜一との師弟関係は深く、本間の最高裁事務総長就任は両人の信頼によるものであった（『愛知大学五十年史 通史編』―同史編纂委員会編、2000 年。以下『50 年史』―49～50 頁のほか、前掲の加藤勝美『愛知大学を創った男たち』368～373 頁に詳述）。

7）『20 年史』132 頁。「本学から本間学長・小岩井学監が葬儀に参列」と続けている。

8）『50 年史』59～60 頁には「戦前、衆議院議員として陸海軍大臣現役武官制に断固として反対した硬骨の自由主義者の真髄」（59 頁）として、この記事の主要部が引用されるとともに、全文の写真が掲載されている（同頁。『写真集 愛知大学の歴史 1946-1996』―愛知大学 50 年史編纂委員会編、1996 年―17 頁や、前掲の加藤勝美著書 366 頁にも掲載）。

現在も一サークルである新聞会によって刊行されている『愛知大学新聞』は、当初は大学当局も編集・刊行に関わっていた、公的な機関紙であった。

9）この『愛知大学創設期からの 想い出写真文集』（同書編集部編、1997 年）には、各氏よりの寄稿や文献よりの引用を一部省略した版も存在するが、これらは“完全版”の 6,9 頁に収録されている（本文での内容・タイトルの紹介は収録順）。

10）2007年に刊行した同ブックレット（「愛知大学東亜同文書院ブックレット」別冊。愛知大学内で無料配布中）は、前年秋に創立60周年記念事業の一環として愛大各校舎で開催された、同名の写真展示会で使用した各パネルを再構成したものである。この展示会で中心的役割を担った、東亜同文書院大記念センター運営委員の越知専氏（愛大卒業生）は、前掲の『…想い出写真文集』編集でも代表世話人を務めたほか（本文でも後述）、2009年には『本間イズムと愛知大学』実例編および資料編を、同センターから刊行している（近く続編を別方面から刊行予定）。

11）加藤氏の同著書は副題の通り、膨大な収集資料から本間喜一・小岩井淨両人の生涯を追ったものであるが、林毅陸についても最終段階で、『生立の記』などをもとにした記述が追加された（愛知大学側からの編集委員に筆者も参加）。

12）神野太郎氏（1903～83。1927年慶應義塾大卒）について、いま少し述べれば、「神野（じんの）新田開発などを手がけた実業家・神野三郎氏の実子で、父を継ぎ各方面で活躍。その人脈を生かして愛知大学設立に協力した」（前掲『愛知大学創成期の群像 写真集』29頁）人であり、愛大創立当時は中部ガス社長・豊橋文化協会会長・豊橋商工会議所会頭を務めていた（『豊橋百科事典』―同事典編集委員会編、2006年―154～155頁に記載あり）。息子の神野信郎氏は前掲『…想い出写真文集』完全版８頁で、「神野新田に仮住まいしていた私の家に林先生らを時々お招きして、〔…〕新生日本の在り方など話が弾んでいたのを覚えている」と述べるとともに、林毅陸を父の「慶応大学時代の先輩」と呼んでいる。

13）これまでインターネットで確認した「エピソード」の一例としては、慶應義塾長として林毅陸が、1933年に応援部の正式な創立を祝して「長さ180センチメートル余りの樫材に金色の鷺の彫刻を先につけた指揮棒」を贈り（大澤輝嘉「幻の門」―『三田評論』2010年４月号掲載、慶應義塾大学出版会ホームページ版―）、その“お披露目”となった同年秋の「慶早戦」（野球「早慶戦」の慶應側呼称）で慶大の水原茂選手（のち読売ジャイアンツなどの監督に）の「リンゴ事件」が起こったこと（「慶應義塾大学 応援指導部 75年通史」ホームページ）があげられる。

14）この目録の最後にあげた書について、「一誠以貫百行（いっせいもってひゃっこうをつらぬく）」はすでに前掲『愛知大学創成期の群像 写真集』11頁に掲載。林毅陸の揮毫としては、ほかにも1943年11月の「学徒出陣」時における、慶應の学生新聞『三田新聞』536号紙上での「祝塾生諸君出陣」を確認（白井厚編『大学とアジア太平洋戦争 戦争史研究と体験の歴史化』―1996年、日本経済評論社―287頁に掲載）。

15）西澤直子教授によれば、愛知大学より慶應義塾大学に移られた教授が、林毅陸についてご存知ではないかとのことであった（現在の段階を考慮し、その方のお名前をここで出すのは差し控えることにしたことを了解されたい）。

当面の課題として、愛知大学で所蔵している林毅陸の写真はきわめて少ない現状であり、慶應時代を中心とした林の写真（データ）を、今後機会がある際には提供して下さるようお願いした次第である。

16）全152回に及んだこの連載で、当該の回は「復帰はすれど」の３回目にあたり、「復帰」とは本間喜一の最高裁から愛知大学への復帰を意味している。和木氏が前東亜同文書院センター長の藤田佳久名誉教授（同氏も続く形で2011年10月から12月まで、『中日新聞』夕刊に「東亜同文書院の群像 日中に懸ける」を連載）と執筆の打ち合わせを行なっていた際は、越知氏も常時同席していて、そこでの教示によるものであろう。

17）前掲『…想い出写真文集』完全版９頁。本文で述べた通り、続けて「林和子氏より 愛知大学への思い」が収録されているが、こちらには関連の記述はない。こういった“知られざる縁戚関係”には、当時の事情やプライバシーによる難しい問題があろうが、愛知大学創立者の相関として、慎重に解き明かしていくべき価値があると思う。